

公家町の京焼

<http://www.kyoto-arc.or.jp>

(財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館



写真1 ごみ穴出土の京焼(18世紀前半)

はじめに 江戸時代の京焼といえ、野々村仁清^{にんせい}、尾形乾山^{けんざん}の名前がすぐに思い浮かびます。また「古清水」とよばれる華麗な色絵陶器を連想する人も多いでしょう。

京都は、江戸時代の初めから京焼という当時最高の焼物を生産し、茶道具や日常の器として受容した、産地と消費地の両面をあわせ持つところ。このように比較的身近な京焼ですが、近世考古学が始まってから四半世紀が経つ現在でも、じつは未解決の問題が多いやっかいな焼物です。

京焼は遅くとも慶長年間(1596~1615)に始まったとされますが、粟田口をはじめ岩倉^{みそら}・御菩薩^{せい}・清

閑寺^{かんじ}など初期の窯は、今もって何処にあったか定かではなく、その操業年代も不明なのです。

公家屋敷跡出土の京焼 それでは、実際にどのような製品が作られ、京都の人々に受け入れられていたのでしょうか。1998年から行なわれた京都御苑内公家屋敷跡地の発掘調査で、その手掛かりが見つかりました。江戸時代を通して、消費され廃棄され続けた膨大な出土遺物のなかに、京焼も多量に含まれていたのです。その中には前述の仁清・乾山(写真2・3)の製品も含まれていましたが、ほとんどが現在伝世されている京焼からはうかがい知れない、いわば普

段使いの食器類でした(写真1)。

京焼の歴史 調査で出土した京焼のうち最も古い年代のものは、17世紀後半(1660年代頃)に遡ります(写真4・5)。これは全国の発掘出土例のなかで、年代がわかる資料としては最も古いものの一つです。



図1 初期の京焼の窯跡 位置のわからないものは地名から推定

写真4の平碗は、透明釉の下に
鏝^{まげ}絵で草花文を描き、赤・青・緑
と金彩で上絵を施しています。

写真5の壺は胴部に青と薄緑で
交互に雷文を巡らし、内面には褐
釉を薄く掛けています。色絵陶器
を大成したのは御室窯の仁清であ
ったといわれていますが、ほぼ同
時代にすでに技術的にも完成度の
高い色絵陶器を他の陶工達が生み
出していたのは驚きでした。

また、壺の高台には小さく「御
菩薩」と印が押されていました。
刻印が御菩薩窯を示すものとは早
計に決められませんが、この壺が
つくられた時期には御菩薩窯が広
く知られていたことは確かです。

同じ遺構から「仁清」・「清閑
寺」・「清」など他の印がある陶
片も見つかっていますから、初期
の京焼窯はこの頃までには出揃っ

ていたと思われます。

やがて、京都郊外に散在してい
た諸窯は17世紀末から18世紀初め
頃になって、粟田口・清水・音羽
の3箇所に集約され、京焼の隆盛
期を迎えます。

写真1は18世紀前半のごみ穴か
ら出土した、まさにその頃の京焼
です。需要に応えるように大量生
産と多様化が図られ、絵付けのな
いものや、鏝絵染付で草花文を描
くものが多くなっています。また、
土瓶や灯明皿などそれまでには無
かった器種も多く見られるようにな
ります。

「古清水」と称される瀟洒^{しょうしゃ}で格
調の高い伝世品には、日常品が少
ないのが特徴の一つです。しかし、
高い技術力を示す高級品と、窯の
経営基盤を支えたであろう量産品
とが相まって京焼は成り立ってい

たのです。実際この頃から、江戸
を初め金沢や徳島・大分といった
地方の城下町からも京焼の出土が
目立ってきます。

一方、京焼の影響力は肥前や信
楽窯にも及び、多くの模倣品が生
まれ(写真6)、技術的にも追いつ
いてきた他窯に販路を奪われて
いくのもこの頃からです。

以後、18世紀末頃には、奥田^{えい}
川^{せん}・青木木米^{もくべい}・仁阿弥道八^{にんあみ}らが登
場し、新しい京焼の時代を迎えま
す。

おわりに 今回紹介した京焼は、
公家という他の地方にはない特殊
な階層に属する焼物です。これが
そのまま全国に一般化できるわけ
ではありませんが、近世京都の文
化を象徴する考古遺物の一つが京
焼といえるのではないのでしょうか。

(能芝 勉)

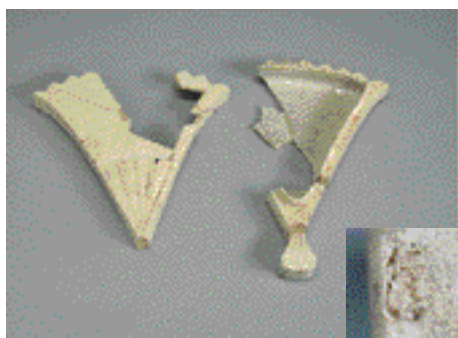


写真2 「仁清」銘 香合
縦推定17.1cm (17世紀末)



写真4 上絵平碗
口径推定13.6cm・高さ4.8cm (17世紀後半)



写真6 京焼を模倣した肥前陶器
口径12.7cm 高さ4.6cm (18世紀前半)



写真3 「乾山」銘 筒形碗
高さ6.1cm (18世紀前半)



写真5 「御菩薩」銘 上絵壺
胴部幅12.8cm 残存の高さ8.4cm (17世紀後半)